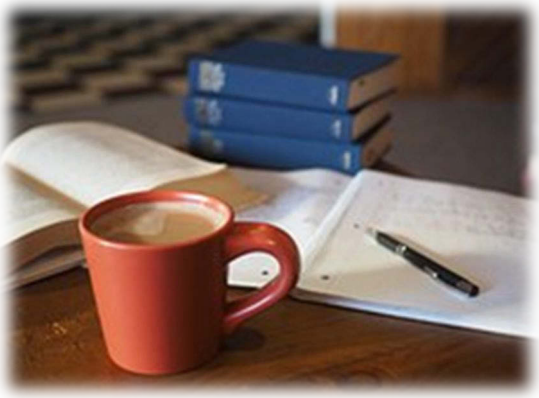
湘南医療大学　ティーチング・ポートフォリオ



大学名　湘南医療大学
所　属　保健医療学部　看護学科
名　前　伊藤ふみ子
作成日　2023年 9 月 22 日

【目次】

１. 教育の責任 ・・・1

２. 私の理念・目的 ・・・1
　1）私の理念
　2）理念をもつに至った背景

３. 教育の方法・戦略 ・・・2
　1）対象を理解しようとする姿勢の育成
　2）自分の考え・行動を省察していく力の育成

４. 学習成果 ・・・3
　1）グループワークとプレゼンテーションで自らの力を育成
　2）臨地実習での体験を振り返り発展させる力を育成

５. 改善のための努力 ・・・4

６. 今後の目標 ・・・5
　１）短期目標
　２）長期目標

【添付資料】 ・・・5

１．教育の責任

本学は「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」という建学の理念をもとに、看護実践力を養い地域社会に貢献できる看護職者を輩出することを目的としている。その中で、カリキュラムに沿って講義や演習・実習指導を行いながら、自ら考えて行動できる看護実践者を育成することが責務である。

１）令和 5 年度は以下の科目を担当している

・2 年次：ナーシングプロセスⅠ、ヘルスアセスメントⅡ

上記科目は、2021 年度から展開されている新カリキュラムであり、看護実践能力の育成をめざし、タナーの臨床判断モデルを基に対象者の発する反応から「気づく」力を養い、適切な臨床判断に結び付くアセスメント力を育成している。

・3 年次：成人看護方法論Ⅱ、成人看護方法論Ⅲ、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、
統合実習＋看護研究

成人期にある人々の健康問題を的確なアセスメントし、必要となる看護支援を実施でできる能力の育成を目指している。

2）令和 5 年度の学科内委員会活動

・看護学科内 FD 委員として、主に授業評価アンケートを担当し看護教員の教育力の向上に向けて検討している。

・看護学科内教務委員として、本学教務事務と連携し学生の履修状況を検討し円滑に学修が進むように時間割や定期試験の調整をしている。

・看護学科内国家試験対策委員として、看護師国家試験・保健師国家試験合格に導けるよう指導している。

3）チューター活動

4 年次チューターとして 19 名の学生を受け持ち、学修や学生生活の指導を行っている。さらに最終学年として看護師国家試験合格に向けての支援を行っている。

２．私の理念・目的

１）私の理念

湘南医療大学看護学科の教育目的・目標、ディプロマポリシーに基づき、教育活動においては、以下の 3 点を目的としている。

①【人間の個を尊重できる力】

看護の対象者を生活者として捉え、尊厳を持った 1 人のかけがえのない存在として権利を擁護する力を養うことができる（患者に傾倒する力）。

②【エビデンスに基づく実践力】

あらゆる対象者の生活と健康課題を理解し、エビデンスに基づき、対象者に必要な看護支援を提供できる力を養うことができる（臨床判断能力の育成）。

③【チームで連携し協同する力】

各専門職の専門性や強みを尊重しあい協同して、対象や望む生き方や自己決定の支援をすることができる力を養うことができる。

※以上3点の力を養うためには、学生の主体性や考えて行動していく力、対象の最善とは何かを考え抜く力を養うことが基盤となると考える。

2）理念をもつに至った背景

看護は、様々な場において人々の健康問題に関与して行きつづける役割を担っている。進展する少子高齢化社会、医療の高度化が進む現代において、人々が看護に求める役割は、増大し、看護の専門性も変化し続けている。2019年度の指定規則の改正では、新たに専門職間協同、ICT、臨床判断の育成を目指した教育を含めることが示されている。これらに伴い、私たち看護基礎教育の現場において、今までの習慣から脱却し広い視座に立った看護に変革する必要性が求められている。また、看護教育の場において「看護職は専門職」であるという認識を育成していくことであると考える。1つの領域に秀でた能力や知識を育成することではない。Styles.M の専門職の定義を基に勝原は、日本の看護職の専門性を5つの要素を挙げており、①社会的意義、②最高で最上の仕事へのコミットメント、③同僚性、集合性、④自己実現・自己成長、⑤倫理・道徳規範としている。私は、これらの5つの専門職の要素を改めて見直し、看護基礎教育携わる1人として看教育の場面において、教育者自らがこれらの5つの要素を意識し、学生に関わっていくことが大切であると考える。それは、対応する学生に真摯に向き合い、学生の持っている力を信じることを意味する。また、学生達が、知識と技術を駆使し、看護の提供の直前まで「最善とは何か」を考え抜く、考え続ける力を育成していきたいと考えている。

3．教育の方法・戦略

1）対象を理解しようとする姿勢の育成

看護者は、対象者を生活者として捉え、対象者の健康問題を把握し看護展開してくためには、対象を理解することが求められる。対象を理解するためには、コミュニケーション能力を向上させていくことが重要となるが、現代の学生は多様な世代を関わる経験が乏しく、社会性の低下や人との関係性が希薄となっていると指摘さている。そのような学生にとっては、緊張を伴う臨床現場で初対面の患者との関わりの中で、対象理解や援助関係を深めていくことは容易ではない。そのため、演習等の授業の中で、模擬患者（Simulated Patient：SP）に参画してもらう授業方法が展開されることが多い。本学でも、SPを導入し演習展開を行うことが望まれるが、SPを育成することは時間もかかり容易なことではない。今後は、模擬患者を養成していきたいと考えるがそれまでは、リアルな臨床現場の状況を作り上げ、学生が患者体験をできるよう授業の工夫をしている。2023 年度の成人看護学方法論Ⅲ（3 年生科目）では、術後観察の演習で、4 年次生の有志に患者を体験してもらうこととした。4 年生は、患者体験をすることによって、術後に多くのライン類を装着していることの拘束感や看護師役の 3 年生の動作や言葉かけが患者として「もっと素早くバイタルを測定してほしい。説明を丁寧に」と患者の立場に立って考

えることができていた。さらに 3 年生は、生身の人間である上級生が患者役であることで緊張感や臨場感を感じていた。さらに、上級生のアドバイスを受け知識を身に着ける必要性を実感していた。今後も、SPを導入した授業計画を工夫していきたい。

2）自分の考え・行動を省察していく力の育成

Dewey（1938）は、人は学習する上でただ経験するだけではなく、その経験全体を振り返り、自己の行動、思考を言語化し、その時の判断について再度考え（reflect）その意味付けをすることで、自己の学びとなると述べている。看護実践力を身に着けるにあたり、省察は重要な位置づけとなる。ナーシングプロセスのシュミレーション学習において、毎授業ごとの自身の看護実践をグループで省察をする時間を設け、気づきや思考の発展を導きだす指導をされていた。それを基に、成人看護方法論Ⅲの授業および、私の授業では自分の考えや行為を省察する時間を設けている。さらに、自らの考えを他者に表出することによって他者から意見やアドバイスを受けることで知見が広がっていると思われた。今後も授業内で学生自身の思考内容やケア実施内容等を省察する時間を設け、主体的な学びにつなげていけるようにしていきたい。

4．学習成果

1）グループワークとプレゼンテーションで自らの考えを発信する力を育成

成人看護方法論Ⅲ（看護過程演習）では、「なぜそのように考えたか」「問題のどこに着目したか」といった思考の過程を重視した。教員は学生の発言を求めるように 問いに対し、「その場で」「自分で」考え、自分の言葉で意見を発信するできる機会時間をできる限り設けている。

●学生のコメント

・自分ではしっかりと調べられていたと思っていたが先生の指摘のおかげでたくさんの疑問が見つかったため、まだまだ頑張ろうと思った。

・発表を行うことで他のグループの発表の良さを学ぶことができた。質問をもらうことでより学びを深めることができた。

2）臨地での体験を振り返り学びを発展させる力を育成

臨地実習（成人看護学実習Ⅰ・成人看護学実習Ⅱ・成人基盤実習）では、学生が既習の学習内容と臨地での看護実践を統合させることができるような工夫をしている。病態の理解が進むように病態カンファの実施や臨地での体験をリフレクションし自らの看護実践の評価・修正ができるような時間を設けるようにしている。

●2022 年度授業評価アンケート結果

・ナーシングスキルⅠ（履修者 141 名、回答数 10 名、回答率 7.9%）

授業評価アンケートの回収率は、7.9%と低く、信頼性に欠ける点はあるが、すべての項目において、平均 4.5 以上（5 点満点）と高い得点をしめしており、「総合的に判断し良い授業であったか」については、4.6 以上と高く概ね満足のいく授業であったと言える。

・成人看護方法論Ⅱ（履修者 77 名）

授業評価アンケートの結果は、ほぼすべての項目において平均が 5 点満中、4.0 以上と良好な結果であった。「総合的に判断し満足できる授業であったか」は、4.11 と満足度が高かったと言える。

・成人看護方法論Ⅲ（履修者 77 名）

授業アンケートの結果は、すべての項目において平均が 5 点満点中、4.0 以上と良好な結果であった。「総合的に判断し満足できる授業であったか」は、4.26 と満足度が高かったと言える。

●臨地実習授業評価アンケートの結果（2022 年度）

・成人看護学実習Ⅰ（履修者77名、回収数68名：回収率 88.31%）

□実習評価アンケートの結果はほぼ全ての項目で平均が 5 点満点中 4 点以上と良好な結果であったが、実習課題や記録物の量は適切であったかという項目に関してのみ、3.43 点と他の項目と比較するとやや低い結果であった。実習全体を通して、「今後の学習意欲につながる有意義な実習であった」は、平均 4.76 と満足度の高い実習であったと言える

・成人看護学実習Ⅱ（履修者77名、回収数73名（回収率 94.80%）

臨地実習授業評価アンケートの結果は、ほぼ全ての項目で平均が 5 点満点中 4 点以上と良好な結果であったが、「実習課題や記録物の量は適切であった」という項目のみ、3.67 と他の項目と比較するとやや低い結果であった。「今後の学習意欲につながる有意義な実習であった」が 4.77 であり、満足度の高い実習であったと言える。

・成人基盤実習Ⅱ（

学生による授業評価アンケート結果では、ほぼすべての項目において平均が5点満点中４．5以上と良好な結果であり、「今後の学習意欲につながる有意義な実習であった」が 4.89 と学びの多い実習であったと言える。

５．改善のための努力

１）自分で考えて行動できる看護師になるために省察力をつける

学生が授業に主体的取り組めるよう、講義内容を活かすことができる課題解決学修やグループ学習、省察をする時間を意図的に取り入れる。

２）事前・事後学習の工夫

授業に活きる事前・事後学修を工夫し、授業と自己学習が繋がり合うようにしていく。自己学習とは、事前・事後学修のみならず、自己課題解決学修や実習を意識した自主学修をさしている。

以上 2 点の工夫をしていくとともに、学生に真摯に向き合い、自分自身が改善へ向けて具体的な取り組みを丁寧に積み上げていきたい。また、学科として連携して取り組むべき科目があることを認識しているので、その必要性に鑑み、積極的に科目間連携を進め、授業内容を深化させていく。

６．今後の目標

１）短期目標

①学生の主体的な学びにつなげる事前事後学修の検討（2025年度3月31日まで）

②学生の興味関心を引き出す学習教材の開発（2026 年度3月31日まで）

③学びの連環を意識した有機的な科目間連携

２）長期目標

今後の臨床現場では、看護実践力の育成が求められている。領域横断で実施している新カリキュラムを実施するにあたり、臨床判断の育成をするために、気づきの育成、気づきから李臨床判断、看護実践に繋がるシュミレーション教育を充実させていく。その過程において思考力・判断力・表現力を育むとともに、自ら課題を見つけ、自力解決することによって学び方を学び、課題解決力を身に付けさせる。

【添付資料】

資料 1：シラバス

資料 2：授業資料

資料 3：講義で作成したワークシート（成人看護方法論Ⅲ）

資料 4：授業評価アンケート

資料 5：FD 研修会報告書